

30年代のウィーンで何が起きたのか

Sten Johansson
“Secesio”

Mondial、2021、253p

3枚の写真が本書の表紙を飾っている。一番上は、グスタフ・クリムトの「ベートーヴェン・フリース」。ウィーンにある分離派展示館の壁面を飾る大作である。中央の写真は、労働者向けの巨大な公営住宅カール・マルクス・ホーフ。ウィーンでは第一次世界大戦後、社会民主党が長らく政権を握り、「赤いウィーン」と呼ばれていた。その「赤いウィーン」を象徴する建造物である。一番下の写真は、1934年2月の内乱の際に、兵士たちが集結している光景。場所はオペラ座の前か。これら3枚の写真は、都市ウィーンがたどった歴史、この作品の登場人物たちがそこで過ごした歳月を象徴している。

この物語は、1925年から35年の戦間期ウィーンを舞台として、ルイーゼという女性の手記という体裁で書かれており、彼女が愛する女性ウィリーとの生活を軸に展開してゆく。物語は分離派展示館でのルイーゼとウィリーとの出会いから始まり、その後二人はカフェ・ムゼウムで自己紹介して、たちまち意気投合し、やがて愛し合うようになる。

ルイーゼはウィーン在住のユダヤ人で彫刻家であり、ウィリーはデンマーク人で、当時は珍しいフリーのジャーナリストである。この作品では、彼女たちの関係を軸に、ルイーゼの目から見た人びとの行動や世相が精細に描かれている。エゴン・シーレ、ケーテ・コルヴィッツ、カール・クラウス、ジークムント・フロイトなど、著名人も次から次へと登場して、さながら20世紀ウィーン文化史という趣がある。

二人の関係は当時、絶対に口外してはならないものであった。ウィリーはジョニーというブルジョアの男性と形式的な結婚をするが、彼はホモセクシュアルである。また、ルイーゼは子どもを持ちたいという思いから、フランツと結婚する。彼は社会民主党员で、ウィーン市役所で住宅行政を担当している。ルイーゼとフランツはカール・マルクス・ホーフに住む。ルイーゼが結婚したことで、彼女とウィリーと

の間に、すきま風が吹いたりする。

前半では、二人をめぐるエピソードが語られ、とりわけウィリーの果敢な取材がおもしろい。彼女は居酒屋の従業員やブルジョア家庭の家政婦などになったりして、いわば潜入ルポを敢行し、その記事をデンマークの新聞や雑誌に寄稿するのである。

いっぽうで、政治情勢はどんどん緊迫化しつつあった。ドイツでは1933年にヒトラーが政権を掌握し、オーストリアでも反ユダヤ主義や反社会主義の風潮がますます高まりつつあった。ドルフース首相は強権を行使して、社会主義者やドイツとの合邦を唱えるナチスを弾圧する。1934年2月には内戦が勃発し、武装した労働者の拠点となったカール・マルクス・ホーフは軍の砲火を浴びて、大きな損害を被る。フランツはチェコスロヴァキアに亡命する。7月にはナチスが蜂起し、ドルフースが暗殺される。

そうした状況下で、9月にはウィリーが国外退去を命じられ、長く続いた二人の関係もあっけなく終末を迎えることになる。彼女たちが最後に別れの言葉を交わしたのは、9年前に訪れ、愛し合うきっかけとなった、あのカフェ・ムゼウムである。

この手記は1935年に書かれたという設定になっている。ルイーゼはその手記の最後で、未来への希望を記しているが、ユダヤ人であり、レスビアンであり、亡命した社会民主主義者を夫に持つという、二重三重にマイノリティであった彼女に果たして明るい未来は訪れたのだろうか。3年後の1938年にオーストリアはナチス・ドイツに併合され、多数のユダヤ人、同性愛者が強制収容所に送られ、虐殺された。作者はルイーゼと幼い息子の未来については何も語らず物語を終わらせているが、そのことが彼らのたどった運命を暗示しているようにも思われる。

タイトルの“Secesio”も、芸術上の一潮流にとどまらず、旧来の社会からの離脱、民族や階級などによる分離（それも暴力的な）などを示唆しているように思われる。その意味で、この物語は、ロシアのウクライナ侵略を始めとして世界中でますます暴力が顕在化し、差別が拡大している現在、強いリアリティをもって読者に訴えかけてくる。

文体は流麗、明快であり、1950年生まれのスウェーデン人の作者が1930年代にウィーンに生きた若い女性の一人称の語りをここまで細やかに描いているのは驚きである。作者によれば、ウィリーはスウェーデンのジャーナリストであったエステル・ブレンダ・ノルドストレーム（1891～1948）がモデルだとのこと。彼女はレ

スビアンでもあったが、彼女の伝記的事実がこの物語にどの程度反映されているのかはわからない。

(La Movado 2023年3月号掲載。転載にあたって一部表現を改めた)

(追記)

オーストリアとドイツとの合邦ののち、ウィーン在住のユダヤ人たちがたどった運命は苛酷であった。ダッハウ強制収容所を経てアウシュヴィッツ強制収容所に送られ、そこで虐殺された者も多かった。その過程を、資料を駆使して精緻に分析したのが、野村真理『ウィーン ユダヤ人が消えた街 — オーストリアのホロコースト』(岩波書店、2023)であり、この小説の背景を知る意味でも有益な研究書である。同時に、かつての被害者たちの子孫がガザでジェノサイドとしか言いようのない行為を進めているのを日々見せつけられている現在、本書を一読すると、歴史はこのようなかたちで繰り返すのかという思いにとらわれる。